



あいだで
考える

根っからの 悪人っているの？

ひ がい
被害 と
加害 の
あいだ

坂 さか
上 がみ
香 かおり

はじめに 4

第1回 初めての対話 7

『ブリズン・サークル』を観て 11
「わかりたい」と思うには 20
「違い」に出会う 30

第2回 真人さんとの対話 35

刑務所のリアル 37
犯した罪をめぐって 42
大切なものとサンクチュアリ 53
コラム おすすめの音楽 63
サンクチュアリが壊れたあと 64

第3回 翔さんとの対話 75

感情に気づき、感情を動かす 77
サンクチュアリをつくる 86
自らの罪を語る 92
コラム 感情をめぐるワーク 93
聴く・語る・変わる 103

第4回 山口さんとの対話 115

事件に遭遇して——山口さんの被害体験 117
コラム 事件後の子どもとの関係性の変化 128
少年の居場所 129
少年と会う 134
被害者と加害者が直接会うこと——「修復的司法」 141
コラム 修復的司法の個人的な取り組み 148
揺れていい 157

第5回 最後の対話 169

4回の対話の感想 172
根っからの悪人っているの？ 178
おわりに 182

被害と加害のあいだを
もっと考えるための作品案内 184



はじめに

本書の表紙から目に飛びこんでくるのは、「悪人」「加害」「被害」などのネガティブなワードばかりだ。暗い、重い、とパスすることだつてできたのに、あなたは本書を手にとつた。なぜか？

「犯罪者」つていつたいどんな人たちなのか、興味をひかれたから？

「なんで悪人の肩持つのよ？」つてムカつときたから？

逆に、「サイテーなやつ」のことが、実は気になつてる？

いや、「自分のことが書いてあるかも」と思った人だつていると思う。

理由は何であれ、あなたは本書を開いた。見えない境界線の前に立っている。

向こう側の世界には、椅子が円を描いて並んでいる。

その一つは、あなたの席。他者の言葉に耳を傾け、他者の痛みについて、またあ

なた自身の痛みについて考えていくための空間だ。

あなたは、今、その境界線を越え、向こうの世界に足を踏み入れようとしている。

著者である私は、1990年代にテレビディレクターとしてスタートし、2000年代からは劇場公開のドキュメンタリー映画の監督として、暴力の加害・被害をテーマに取材を続けてきた。取材や撮影の舞台は、刑務所や少年院など、いわば向こう側の世界であることが多い。最近はそうした場で、映像やアートを使ったワークシヨップを行うこともある。それらを通して私は、見えない境界線を浮かびあがらせ、その源をたどり、境界を飛び越えて向こうの世界とこちらの世界を行き来してきた。

受刑者や少年らと接していて常に感じるのは、次のようなことだ。

被害の経験が加害につながり、加害は新たな被害を生んで、暴力は連鎖していく。

暴力の連鎖は、いかに断つことができるか？

暴力に奪われた希望は、いかに回復することができるか？

正直に言うと、本書の話をもちかけられた時、躊躇した。暴力や被害・加害を

ぐる本は、すでにたくさん存在しているからだ。そこで、10代の若者と被害者側・加害者側の当事者との対話を思いついた。それぞれの経験や感覚を語りあうことで、新しい何かが生み出されるに違いない。想像するだけで、ワクワクした。

とはいうものの、対話を成立させるのは容易ではない。ましてや、年齢も背景もまったく異なる初対面の人々が、いきなり被害や加害をめぐって語りあうのだ。

悩んだ末、対話を5回重ね、次第に深めていくことにした。筆者がファシリテーター（＝司会・進行役）を務め、第2回〜第4回はゲストを迎える。ゲストとは綿密に内容を検討し、ワークを実践した回もあれば、予定外の話題で盛りあがった回もある。毎回、ゲームなどのアクティビティも用意し、緊張をほぐす工夫も凝らした。本書は、そのような対話のリアルな記録だ。コラムや巻末の「作品案内」も参考にしつつ、あなたもこの場に参加しているつもりで読み進めてもらえたらうれしい。

それでは、そろそろ席について、対話を始めよう。

*「真人さん」「翔さん」の名前は映画『プリズン・サークル』での仮名をそのまま使用した。
また、本書では「被害者」の語を「被害者遺族」も含めた意味で用いている。

第1回

初めての対話



話して、情報を共有したら

「わかりあえた」って言えるのか。

「話しあう」っていうのは

大事な手段だとは思うんですけど、
どこまで行ったら「わかりあえた」と言えるのか……。

（のぶき）



「犯罪者」と聞くと、
どんなことを思い浮かべますか？
血も涙もない、モンスター？
殺人に快楽を覚えるシリアルキラー？
何をしたって変わりようのない、ヤバい人？
それとも……。

初回の対話は、日本のある刑務所で行われている
対話をベースにしたプログラムについての映画
『プリズン・サークル』を観て
気がついたことや、疑問に思ったこと、
「なんとなく、わかるなあ」と思ったことなどを
言葉にしていくところから始めていきます。

かおり では、私から自己紹介をしますね。坂上香です。みんなに観てもらった

『プリズン・サークル』のような、ドキュメンタリーの映画をつくる仕事をしていま
す。大学で教えてもいます。でも、「監督さん」とか「先生」とか思う必要はまった
くなくて、みんなよりちよつと長く生きてきた、これから語りあつていく仲間のひ
とりだと思ってくれるとうれしいです。

* 映画『プリズン・サークル』

日本の刑務所を撮影した初めての劇場公開ドキュメンタリー映画。国と民間
が協働運営する男子刑務所「島根あさひ社会復帰促進センター」（島根県浜田市
旭町、2008年開設）で始まった、「TC（回復共同体）」（15ページ参照）のプ
ログラムを2年間撮影。4人の受刑者を中心に、彼らが教育支援員や他の受刑
者の助けを得て、自らの生い立ちや犯罪をふりかえり、自分自身の言葉で語れ
るようになっていく様子を記録している。撮影の許可に6年、完成まで10年か
かった。（監督 坂上香／製作 out of frame／配給 東風／2020年公開）

かおり 私はここを対話の場にしたいと思っています。誰かが発した言葉にみんな
がいろいろな反応していく、ピンポンみたいな感じにしたいなつて。すぐに答える

のが難しい時は、「パス」「わからない」など、自分なりに表現してくださいね。

で、みんなにも自己紹介をしてもらいたいんだけど、いきなりは緊張すると思うので、ちょっとゲームみたいに始めましょう。床に色のカードを置きます。今の気持ちでも、最近の気持ちでもいいので、自分の気持ちに合う色を探して、言葉にしてみてください。ぴったりの色がない場合は2、3枚とつてもいいですよ。

では、私から行きますね（濃いオレンジのカードをとる）。今日すごく暑いじゃないですか。溶けそうなくらい。しかも、みんなに初めて会ってドキドキワクワク、でもどうなるか怖い、みたいな（笑）。だから光沢のあるオレンジが今の私の気分です。

私のことは「かおりさん」って呼んでくれるとうれしいです。好きなことは映画を観たりつくったりすることです。よろしく願います。

……じゃ、当てもちやつていい？ うんうんつてうなずいてる、ようさん。

よう （白っぽい薄いグレーのカードをとる）名前は「よう」で、高2です。好きなこ

とは本を読んだり、絵を観たり、人と話したり、文章を書いたりすることです。

ぼくは、考え方がニュートラルなのが自分のいいところだと思つていて、ここでもニュートラルな考え方ができればいいなつて思いながら来たんですけど、ちょっと濁つてる感じもあるので、こういう色にしました。よろしく願います。

まほ 名前はまほです。大学1年です。好きなことは、喫茶店に行くこと、料理をすることです。

赤が好きです。赤つてあたたかい色だと思つてたけど、「あたたかいけど冷たい赤」つていうのもあるなーと思つて……。よろしく願います。

なつね なつねです。高校2年で、好きなことは野球観戦です。

私も、かおりさんと同じオレンジで。今日まで3日間、長野に行つて、全国の高校生たちと交流したんです。たくさんの知らないことや、言葉に出会つて、すごく熱いものがいま、たまつてる。外も暑いし中も熱いしで、この色にしました。

のぶき のぶきです。中学3年で、好きなことは絵を描くことと工作です。

今、結構緊張してて。でも、すごく楽しみにしていたので、ちょっと光つてる青にしました。単純に青が好きです。よろしく願います。

『プリズン・サークル』を観て

主人公は4人の若い受刑者

かおり 今日から、『プリズン・サークル』を題材に、5回の対話を行います。こ

の映画は、みなさんには前もって観てもらったわけだけど、主人公は20代の4人の受刑者^{じゅけい}でしたね。思い出してもらうために、彼ら^{かれ}の特徴^{とくちょう}を挙げますね。

真人さん——窃盗癖^{せつとうへき}があった人。6歳^{さい}ぐらいからお弁当とかをずつと盗^{ぬす}んでいて、映画の途中^{とちゅう}まで、「盗^{ぬす}んで何が悪い」と、罪悪感が感じられなかった人です。

翔^{しょう}さん——傷害致死罪^{しょうがいちし}（1人にけがをさせ、その結果相手を死なせてしまった罪）で、刑期は8年。この刑務所では最も重い刑を受けた人です。

拓也^{たくや}さん——詐欺罪^{さぎ}と詐欺未遂罪^{みすい}の人。お父さんからの虐待^{ぎやくたい}について最後のほうで語り、映画のラストに、出所するところを写したシーンがありました。

健太郎^{けんたろう}さん——映画の後半、被害者^{ひがい}と加害者の役を演じるロールプレイの場面で加害者役をやった人。おじさんを襲^{おそ}って強盗^{きやうとう}をしてしまった人です。

今回の対話では、第2回に真人さん、第3回に翔^{しょう}さんが参加してくれます。

「言葉」の映画

かおり 映画を観て、みなさん、どう感じましたか？ 印象に残った場面や、「映画を見る前と後で考えが変わったな」って思うことがあれば挙げてください。

のぶき 人って環境^{かんきやう}によって、良くも悪くも変わるんだなって思いました。あと、

刑務所のイメージが、自分が思っていたのとだいぶ違^{ちが}った。「厳しいところなのかな」とは思ってたんですけど、何をするにも許可がいるなんて知らなかった。社会復帰をめざすための場所のはずなのに、人に従^{したが}ったり許可を求めたりってことばかりさせていて、本当の意味でその人の支援^{しえん}になっているのかな、って思いました。

なつね 私はこの映画を2回観たんですけど、1回目はぼんやりした感じで観てしまつて、正直、確信できるものがなくつて。だけど2回目に観た時に、特に「2つの椅子^{いす}」が、すごく衝撃^{しょうげき}的だった。

＊「2つの椅子」

一般^{いぱん}には「エンプティ・チェア（空の椅子）」と呼ばれる、2つの椅子を使って行う心理療法^{りゆうほほう}のこと。自分の中にある異なる感情や願いと対話をして、それらを十分に感じとり、緊張を解き、心の葛藤^{かつどう}をやわらげることが目的。

映画では、翔^{しょう}さんが椅子に座^まり、向かい側の空の椅子に「良い死に方をしたい」と願っている自分が座っていると想定し、語りかけていく。自分を責める語りの中で、「人の命を奪^{うば}った自分は幸せになる資格はない」という固い思い、幸せを願う自分への強い反発^{はんぱつ}や拒否^{きひ}が浮^うき彫^ぼりになる。その後、椅子を座り換^か

え、「良い死に方をしたい」側の自分の声を語ること、「罪悪感を持ち続けながらも、幸せになりたい」という抑圧よくあつされた思いが見えてくる。

なつね やつぱり、いちばんは「言葉」。言葉がこの映画の題材になってるっていうことをいちばん感じた。環境によって言葉のあり方も変わってくる 것과、自分が使ってる言葉についてもすごく考えさせられました。

まほ 私は、映画に出てくる彼らの生い立ちとかを見て、彼らが最初の最初のつまずきみたいところで持った感情は、私たちにもある感情だと思ったし、「そのさみしさは、その感情は私も知ってる」って思うことが多くて……。なのに、なぜ今彼らと私は、こんなに遠い、反対側にいるんだろう、私はどうしてこっち側の世界で、こういうふうにいるんだろう……というようなことを感じました。

あんなふうに感情の深いところをお互い探りあえる会話ができることが、すごくうらやましい。私も対話のある場所に身を置けたらいいのについて思う。

「感情のわからなさ」に共感

よう ぼくは割と今まで、本を読んだり、人の話を聴いたり、映画を観たりし

て、「加害は被害から生まれる」っていうことを考えてきていたので、そういう加害と被害の連鎖れんさの渦中かちゅうにあった人と実際に話すことができるっていうこの企画に、すごく興味を持ったんです。『プリズン・サークル』を観て、**TC**の活動はすごく有意義なものだと思いましたし、学校教育とかに**TC**に近いものがとり入れられれば、いじめなどの問題も解決されていくのについて思いました。

* **TC** (回復共同体)

「回復共同体」(セラピューティック・コミュニティ Therapeutic Community 「治療共同体」ともいう)とは、依存症や犯罪などの問題を抱える人々のための、回復と人間的成長のためのプログラム。刑務所の中に設置される**TC**では、「再犯防止に向けた更生のための教育」として、共同生活や独自のカリキュラムを通して、参加者同士が語りあい、自らが抱える痛みを見つめ、他者に与えた被害を自覚する。島根あさひ社会復帰促進センターには日本で唯一、刑務所の中に**TC**が置かれ、アメリカの**TC**「アミティ」(47ページ参照)のカリキュラムを使用している。

かおり さつき、まほさんが「その感情は私も知ってる」って言ったよね。どういうところが「知ってる」「わかる」って思ったのか、もう少し聴かせてくれる？

まほ 映画の中で、幼い頃、親が家に帰ってこなかったり、いなかったりしたつていう話があった。別に私の親がそんなふうだったわけじゃないんだけど、幼い子にとって、自分をいちばん大切に思ってくれる人はまずは親だから、その存在とのズレを少し感じただけでも、とてつもない不安に襲われると思うんですよ。

あと、「感情を認識する」つていう「認識」(77〜78ページ参照)がプログラムの中にあるじゃないですか。そこで言われる「感情のわからなさ」ということに、すごく共感した。ふだん、「自分がどう思っているか」とか「あの時に感じた感情はこうだった」とか、語り切ることでつてめったにない。私は特に、なんかもやもやしてて、何かがうごめいてるけど、それがなんなのかわからない……。そういうところで、自分にも似たような瞬間があるなつて思つて、共感しました。

「2つの椅子」と〈もうひとりの自分〉

かおり なるほど。……他の人も、映画の中で「わかるな」つて思つたこと、ある? 「こういうこと、自分も体験したな」とか、「あー、こういう気持ち、なんかわかるな」つて思つた場面はあつた?

よう 「2つの椅子」(13ページ参照)をやつたのは翔さんでしたっけ? あの場面

を観て、……たとえばぼくが日常生活で何かを判断する時に、「この考え方でいいのか」とか考え始めると、何かを考える、それに反論する、反論してまた考えるつていうふうになつて、本当にいろいろ出てくる気がします。

かおり 複数の自分がいるような?

よう はい。そういうふうに分の中で葛藤する時つて、いろいろな気持ちの対立がありうると思うんですけど、あの場面では、翔さんの抱える葛藤が2つにちゃんと分けられて、「対立」の形で話せているのが、すごいなと思いました。

なつね あのシーンで、幸せになりたい自分が、幸せになつたらだめだと思つている自分に向かつて、「俺に任せてもらえませんか」つて言うじゃないですか。私もたとえば授業で発言する時とかに、「これ言つたらこうなつちやうんじやないか」つて思つたりとか、そういう〈自分とは違う自分〉みたいなものの存在を、結構日常的に感じてる。「今しやべつてる自分じやなくて、〈もうひとりの自分〉に助けてほしい」とか、翔さんも言つてたように、「じやましないでほしい」とか。〈もうひとりの自分〉がいるせいで本当に言いたいことが言えなかつたり、考えてることを〈もうひとりの自分〉に拒まれたりつていうことが、私の中にもある。でも、私は実際にそれを言葉にしたことはないから、単純にやつてみたいつて思つた。

かおり 「言葉にしてみたい」と？

なつね うん。きつと、口に出すことでわかることもあるだろう

し。心の中で考えるだけじゃなくて、言葉に出すことで、その対立がはっきりして、不安とか葛藤が少なくなるんじゃないかなって。

かおり へえー、そういうところで共感したんだね。のぶきさんはどう

ですか？

のぶき なつねさんが言ってたようなこと、私にもあるんです。「何かしたい

な」って思った時に、「でも」とか、「こういうことあって失敗したじゃん」とか、

そういう過去の失敗例が、……それを「もうひとりの自分」って言っていいかわ

かんないんですけど、ぱつと出てくるんですよ。何か「やりたい」と思っても、や

める理由がぱつと出てきちゃうことが結構あって。授業の発言の時とか、困ってる

人がいて助けようかどうしようか迷う時とか、そういうささいなことで出てきます。

かおり うん、うん。

自分を守る必要性

なつね その「もうひとりの自分」についていろいろ考えたんだけど、今、自分

がいちばんフィットするのは、「自分で自分を守るために、（もうひとりの自分）っていう内的な存在がある」っていう考え方。「傷つきたくないから」とか……良くも悪くも、まわりから自分を守るためのもの、そのために自分を制御するものでもあるのかなって。

のぶき 「自分を守るため」っていうのは、本当にそのとおりだなって思います。

私は、親から「のぶきは学校と家とで別人なんじゃないの？」ってよく言われるんですけど、家族って私にとってはいちおう気心知れた仲っていうか、距離が近いので、自分を守る必要がないんですよ。リラックスして過ごせるので、家族に対しては「もうひとりの自分」も存在しない。そういうふうに、自分を守る必要性の度合いで自分自身がかなり変わるなっていうことを、今の話を聴いてて思いました。

かおり なるほど。「自分を守る必要性」って、どういう時に出てくるのかな。

よう ぼくは、前は、大勢の友人といえる場所では「自分を守る」っていう感覚がちよつとあつたんですけど、今は逆に、大勢といえる時は流れに身を任せてただ楽しむ、そういう自分をつくるっていう感覚が自然に生まれてる。それも一つの自衛みたいなものなのかもしれないんですけど……。でも、自分をわかってくれる人はたくさんいて、それぞれに、少しずつ違う胸の内を見せることができる。……そう

